

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：32607

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26463430

研究課題名(和文) がん患者を親に持つ子どものグリーフケアを支える医療者育成システムの構築

研究課題名(英文) Construction of a Grief-Care Training System for Care Staff in Support of Children of Cancer Patients

研究代表者

小島 ひで子 (Kojima, Hideko)

北里大学・看護学部・教授

研究者番号：50433719

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：医療者育成システムを目指し、その基盤となる基礎教育プログラムの継続評価として、子どもに対するグリーフケアへの関心や実践への意欲は向上し、プログラムの有効性が明らかとなった。また対象者から、より実践に即したプログラムの要望があり、実践教育プログラム案を作成し、有効性を調査した。必要と考える知識は3ヶ月後も定着し、介入必要事例への関心は向上していたが、介入実践例は半数程度であり、事例検討会などの継続支援の必要性が示唆された。定期的に基礎・実践教育プログラムを継続し、事例検討会を定着していくことが、がん患者を親に持つ子どものグリーフケアを支える医療者の育成につながる事が期待できる。

研究成果の概要(英文)：A basic education program for care staff that provides grief-care for children of cancer patients was continually evaluated. Results showed an enhanced interest and motivation towards care for children of cancer patients, affirming the program's effectiveness. Also, in response to the participants' request, the practical education program was developed and assessed. The survey held three months after the seminar showed that while essential knowledge for grief-care was still satisfactory and interest in the necessary cases of grief-care had increased, but only half of the participants were actually involved in necessary practice. Thus, a demand emerged for a case study workshop as an aid to practice. It is anticipated that within care organizations, a systematic implementation of basic practical educational program and case study workshops on a regular basis would improve the effectiveness of training for care staff that provide grief-care for children of cancer patients.

研究分野：小児看護学

キーワード：グリーフケア がん患者を親にもつ子ども 医療者教育

1. 研究開始当初の背景

(1) がん患者を親に持つ子どもは、親への告知から死別のプロセスの中で、様々な影響を受け悲嘆プロセスをたどるといわれている。さらに医療者の責任として死別前から遺族への援助を考えていく必要性が示唆され始めた。北米の医療機関では、親ががん告知を受けた段階から死別に向けて継続した子どもへのグリーフケアプログラムが実施されている。日本では 2008 年厚労省支援事業として Hope Tree が取り組み始めたが、多くは緩和ケア領域等で医療者及び家族が試行錯誤しながら、個別に対応しているのが現状であり、子どものグリーフケアは遅れている。また遺族へのグリーフケアが普及していない日本では、子どもに、身体的・精神的症状が予期悲嘆反応として出現しない限り、医療システムの中で対象とされることは少ない。さらにがん患者を親に持つ子どもへのグリーフケアシステム構築に視点を当て系統立てた研究は希少であり、システムを支える医療者の育成は、重要であると考えます。

(2) そこでがん専門病院看護師を対象に、がん患者を親に持つ子どもへのグリーフケア意識調査を実施した結果、子どもの予期悲嘆ケアの重要性は認識していたが、子どもの死の概念・悲嘆プロセス等の知識不足、子どもとのコミュニケーションの難しさ等を理由に、実践の困難さをあげ、看護師自身の卒後教育として「子どもへのグリーフケア」を必要としていることが明らかとなった。そこで、研究者は、がん患者の子どもを含む家族ケアを行う医療者への教育の重要性を再認識し、がん患者を親に持つ子どもへのグリーフケアにあたる医療者を対象とする「基礎教育プログラム」開発に取り組んでおり、継続的にプログラム評価を実施し有効性を検証すると共に医療システムの中に取り入れていくことが必要であると考えます。

2. 研究の目的

がん対策基本法で緩和ケア推進の必要性は明確になったが、増え続けるがん死による親の喪失を経験する子どもへのグリーフケアを家族ケアの一環として取り上げる必要がある。その中でも親のがん告知から親との死別に向けて、子どもの予期悲嘆ケアを医療者として早期に取り組む課題がある。そこで研究全体の構想は「親のがん告知から死別後に向けてのがん患者を親に持つ子どものグリーフケアシステムの構築」とした。本研究の目的は「がん患者を親に持つ子どものグリーフケアを支える医療者育成システムの構築」である。

(1) がん患者を親にもつ子どものグリーフケアに対応できる医療者のための基礎教育プログラム（以下基礎プログラムと記す）の継続評価を通して、その有効性を明らかにする。

(2) 基礎プログラムで使用中の学習教材（研究者が作成）の効果及び応用方法を検討する。

(3) 実践教育プログラム（以下実践プログラムと記す）の必要性を検討し、そのプログラムの有効性を明らかにする。

(4) がん患者を親にもつ子どものグリーフケアに対応できる医療者を系統的にどのように育成していくかを検討する。

3. 研究の方法

(1) 平成 24 年から継続実施している「がん患者を親にもつ子どものグリーフケアに対応する医療者のための基礎教育プログラム」（JSPS 科研費 23593335）に基づいたセミナー参加者を対象に、実施前後でがん患者を親に持つ子どものグリーフケアへの意識および実践等に関するアンケートを実施した。調査期間は 2015 年 1 月～3 月。北里大学看護学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 26-18）。研究者間でアンケート分析をし、継続評価を基に、有効性及び今後の課題を明らかにした。

(2) 教材の効果および応用方法について、関東近郊のがん拠点病院で同意の得られた看護部教育担当者を対象に教材送付及びアンケートを実施し分析した。調査期間は、2016 年 10 月～12 月、目白大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 16-013）。

(3) (1) のアンケート結果より、明確化した課題に基づき、より実践に応用できるプログラム案を研究者間で精選検討し作成した。その実践プログラム案に基づいたセミナーを基礎教育プログラム修了者、子どものグリーフケアを実践している医療者を対象に、3 回実施し、セミナー実施前、セミナー直後、セミナー 3 ヶ月後に、「子どもの実践的なグリーフケアに必要な知識および実践行動」の視点からアンケートを実施し分析した。尚プログラムは、3 回のセミナーで精選した。北里大学看護学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 27-16-4）。調査期間は平成 28 年度 1 月～平成 29 年 3 月であった。

(4) 上記の基礎プログラム及び実践プログラムの評価を元に、医療者育成システムの構築について検討した。

4. 研究成果

(1) がん患者を親にもつ子どものグリーフケアに対応する医療者のための基礎プログラムの継続評価

研究対象者 45 名中 38 名から回答があった。セミナー後グリーフケア対応：「気になる事例」の有無について「あった」との回答が 55%をしめ、その中で「スタッフ間での話し

合い」が「できた」のは87%であった。対象者38人中9人が、13項目の記述回答をし(複数回答)意図的に話し合いの機会をもち、患者や子どもへの介入について情報共有をしていた。話し合いの内容は、研修資料を活用し、患者や家族の背景に関心をもち、子どもとのコミュニケーション(声かけや伝え方)看取り時の対応、積極的な関係づくりに向けたスタッフへの促しであった。

「事例への介入」は、「非常にできた」「できた」計57%であった。12人の対象者が、16項目記述回答をし(複数回答)専門家(小児専門看護師や臨床心理士など)への介入依頼、看取りや病状説明などの直接ケア、患者や家族と子どもへの関わりに関する話し合いなどの間接ケア、スタッフ教育の実施をあげていた。「あまりできなかった」「できなかった」は24%をしめ、5人の対象者が、5項目記述回答をし、「機会がない、患者の準備不足、死別後ケアの難しさ」をあげた。

「実践に向けて参考になったか」について、「非常になった」47%、「なった」48%であった。対象者38人中14人が21項目記述回答をし(複数回答)「グリーフの知識・有効な教材や方法を基に自信をもち介入できる」「家族ケアの視野が拡大し自己の振り返りやスタッフの意識向上の機会」をあげていた。

「がん患者を親に持つ子どもへのケア関心」は、セミナー後「非常に高くなった」26%、「高くなった」69%であった。子どもへのグリーフケアの必要性を学び、より学びたいと考えた等の回答がみられた。対象者38人中21人が25項目の記述回答(複数回答)グリーフケアの必要性や内容を実感してより学びたいと考えたこと(意識の向上)自己の振り返る機会を通して子ども対象のグリーフケアへの意欲の向上、介入対象を拡大して自信をもち実践できると回答した。

セミナー後、がん患者を親に持つ子どもケアの実施について、「非常にしようと思った」20%、「思った」67%であった。対象者38人中22人が18項目を記述回答し(複数回答)「環境を整備しグリーフケアをする重要性を実感」「子どもへの関心をもち知識や実践を積み重ねたい」「子どものグリーフケアの要望の多さを理解」があげられた。

「がん患者を親に持つ子どものケアをする上でセミナーが参考になったか」については、「非常に思った」40%「思った」49%であった。「がん患者を親にもつ子どものグリーフケアに対応する医療者のための基礎教育プログラム」は、がん患者を親に持つ子どもへのケアに関心や実践への意欲を高めると共に、実践介入への参考になっており、基礎プログラムの有効性が明らかになった。今後はより

臨床状況に即した実践教育プログラムの開発をしていきたい。

(2) 学習教材「終末期患者を親に持つ子どものグリーフケア」の効果と活用方法
99施設中承諾を得たのは16施設であり、回答数は14人であった。有効な点として13人から26の記述回答があった(複数回答)。ステップに分かれているので対応への検討を考えるのに活用しやすい(4人)、カンファレンスの場面が活用出来そう(3人)、実践に向けて使いやすい(2人)等であった。改善点として13人から24の記述回答があった(複数回答)。介入ポイントへの文字表現の改善(5人)、カンファレンス場面の改善(2人)、患者本人の思いの確認(2人)等であった。活用方法について14人から15の記述回答があった(複数回答)。院内研修(家族ケア・がん看護等)に活用(6人)、がん患者のいる病棟の学習に活用(6人)、大学院教育に活用(1人)等であった。回答結果から、本学習教材は特定の部署に留まらず、また臨床実践者・大学院での学習教材としても「子どものためのグリーフケア」を検討する教材として有効であることが示唆された。今後、改善点や要望等をもとに教材開発を継続していきたい。

(3) 「がん患者を親に持つ子どものグリーフケアに対応する実践教育プログラム」開発と有効性の検証

基礎セミナー参加者へのアンケートより、「より実践に即したプログラムの要望」があったため、その内容を研究者間で検討し、「子どもの喪失体験を理解する。」「親の告知後から死別ケアを意識し、先を見越したケアについて考える。」「子どものグリーフケアにおいて支援者に求められることを理解する。」「子どものグリーフケアについて、家族看護の視点から理解する。」「子どものグリーフケアプランを考え、実践での取り組みについて理解する。」を目的とした「がん患者を親に持つ子どものグリーフに対応する実践教育プログラム」案を作成し、セミナーを3回実施した。セミナー前、セミナー直後、セミナー3ヶ月後にアンケート調査し、そのプログラムの有効性について検討した。

実践コース3回の参加者である研究対象者は、38名であった。

実践セミナー評価として「子どもの喪失体験を理解する。」「親の告知後から死別ケアを意識し、先を見越したケアについて考える。」「子どものグリーフケアにおいて支援者に求められることを理解する。」「子どものグリーフケアについて、家族看護の視点から理解する。」「子どものグリーフケアプランを考え、実践での取り組みについて理解する。」について、ほぼ全員が「できた」「おおむねできた」と回答し、子どもの思いをキャッチする、感受性を高めておくなどの「子どものグリー

フケアにおいて支援者に求められることを理解する。」の項目がほぼ全員が「できた」と回答していた。また上記の実践に関連するグリーフケアに必要な知識は、セミナー後、3か月後も、8割を示し十分定着していると評価できた。

セミナー後は、気になる事例への関心は向上し、グリーフケアへの介入の必要性を見出すことができていた。

セミナー前後の実践として、「事例への介入」は、セミナー前と3か月後では、増加しているものの、「事例カンファレンス」は、3か月後に「できていない」との回答が増加した。

子どものグリーフケアへの関心度および実践への参考については、セミナー前、3か月後も変化がなく高い割合を示した。回答者は基礎セミナーの修了者が多く、参加前より関心の高いことが考えられる。

(4)「がん患者を親にもつ子どものグリーフケアに対応する医療者育成システム」について、上記の結果を元に研究者間で討議後、「基礎教育プログラム」「実践教育プログラム」に基づいたセミナーの定期的な開催および実践へのフィードバック、事例検討会の定着等が有効であることが、示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

小島ひで子、油谷和子、林美奈子、児玉美由紀、がん患者を親にもつ子どものグリーフケアに対応する実践教育プログラムの開発—一次評価—、第40回日本死の臨床研究会年次大会、2016、10、9、札幌コンベンションセンター(北海道札幌市)

小島ひで子、油谷和子、児玉美由紀、林美奈子、がん患者を親にもつ子どものグリーフ毛に対応する医療者のための実践教育プログラムに求められることとは、第21回日本緩和医療学会学術大会、2016、6、18、国立京都国際会館、グランドプリンスホテル京都(京都府京都市)

〔その他〕

ホームページ等

子どものためのグリーフケア：

www.grief-care-children.com/

6. 研究組織

(1)研究代表者

小島 ひで子 (KOJIMA HIDEKO)

北里大学・看護学部・教授

研究者番号：50433719

(2)研究分担者

小島 善和 (KOJIMA YOSHIKAZU)

東京情報大学・看護学部・教授

研究者番号：60215259

林 美奈子 (HAYASHI MINAKO)

目白大学・看護学部・教授

研究者番号：90433664

辻 佐恵子 (TUJI SAEKO)

北里大学・看護学部・講師

研究者番号：70422889

内藤 茂幸 (NAITOU SHIGEYUKI)

北里大学病院・小児病棟・係長

研究者番号：20406961

(3)連携研究者

油谷 和子 (ABURATANI KAZUKO)

北里大学東病院・看護部・部長

研究者番号：30406962

(4)研究協力者

児玉 美由紀 (KODAMA MIYUKI)

北里大学病院・看護部・係長

研究者番号：80727032

松野 時子 (MATUNO TOKIKO)

北里大学メディカルセンター・看護部

・師長補佐

阿部 美和子 (ABE MIWAKO)

生活臨床心理カウンセリングセンター

石下 育生 (ISHIOROSHI IKUO)

北里大学・看護学部・助手

研究者番号：80778994